

国語

次の文章は、伊藤孝『日本列島はすごい』からの一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、原則として句読点やカッコは一字に数えます。

日本列島には無数の縄文時代遺跡、貝塚が存在するが、そこから砂金がザクザクと出てきた、という報告^Aを聞いたことがない。現代人は滅多に川原に立つこともなくなつたが、縄文の人々は毎日のように小川のほとりへと足を向けたことだろう。われわれが日に何度も洗面台や台所へいくようなものだ。しかし、メガネが必要ないほど視力がよかつた縄文人たちは、砂金には目もくれなかつた。先史時代、黄金は美の対象でも、信仰の対象でも、ましてや経済の対象でもなかつたということにほかならない。

一方で、黒曜石は場合によつては数百km先の産地からであつても入手していた。本当に必要なものは、なんらかの方法で手に入れていたのだ。当時、驚くほど貴重品であつたその黒曜石の塊から、しなやかな鹿の角を使って一撃で細石をたたき出せるほどの観察眼と手先のキヨウ^アさを持ち、火焰^{かえん}型土器で美の最先端^aを競つていた縄文人は、砂金など（あ）。縄文時代中期、地球の外周の4分の1ほど離れた古代エジプトでは、人々はもう黄金に魅了^まされていたが、日本ではだいたい様子^{ようす}が異なる。

日本列島人が最初に見た金の塊は、「漢委奴国^{かんわのわのこくおういん}王印^{どうほこ}」なのだろうか。これは紀元1世紀に伝わつた可能性が高いとされる。北部九州ではその100年以上前から銅矛^{どうぼう}が作られ続けてきたので、真新しい青銅器が発する光沢まぶしい金色は、少なくとも支配者層にとつては珍しいものではなかつたろう。それに銅矛^イはアットウ^ウ的にでかい。そんな人たちの目に、わずか一辺が2・3cm、109gのちつぽけな金色の物体がどうウツ^ウつたのか。うやうやしく「漢委奴国王印」を授けられた人がどんな表情を浮かべ、内心何を思ったのか、大変興味がある。

やがてわれわれは経験^{けんけん}を積み、「徐々^{じょじょ}にくすんでいく金色」（青銅器や天然に産する黄鉄鉱）と「輝き続ける金色」（金があることを知

る。空海は『性靈集』のなかで、「金は不変之物也」と書いている。平安時代初期には日本においても金は変わらないもの・朽ちはてないものの代名詞となっていたことがわかる。そして、もちろん皆が目の色を変え、欲しがるのは「輝き続ける金色」のほうだ。そこからの展開は早い。そしてお決まりのコースともいえる。現在も金は金融資産の一つに数えられ、インターネットで検索すれば、1gの価格はいくらかがすぐわかる。ここでは、贅沢品であり、長きにわたり人類を魅了してきたこの金属の視点で日本列島を眺めてみたい。

(中略)

仏教の伝来以前、日本列島に存在していた金・銀製品のひとつすべては古墳に集中していたといわれる。生きている人々の生活を彩るのではなく、逝った有力者の副葬品として納められていたのだ。これら金・銀はすべて海外で産出したものであり、「輸入品」だった。

聖武天皇が、疫病の蔓延・天災などに心を痛め、仏教にすがり、天平15年(743年)に大仏造立の詔を発したとき、寄付集めの代表を担ったのは、最初の日本地図作者との伝承も残る行基であった。しかし当時の日本には巨大な大仏を覆い尽くせるだけの黄金は存在していない。その詔からわずか6年後、こんなうまいはなしがあるのか、というゼツミョウなタイミングでついに日本列島からも金が産出した。陸奥の小田郡で砂金が発見されたのだ。江戸時代後期以降、多くの研究者が、それはどこだったのかという検証作業を行ってきたが、現在の宮城県遠田郡涌谷町の黄金山神社のあたりということで意見の(い)。

まず900両(約34kg)の金が献上され、聖武天皇は狂喜乱舞し、天平感宝と改元までしてしまふ。さらに、当時の税金、租調庸のうち調(貢物)と庸(労役)については、陸奥国全域では3年間免除となった。ただ搾り取るだけでなく、きちんと報いていところ^bが素晴らしいようにもみえるが、3年後からは、多賀城以北の郡では、調庸として、公民の男子4人について1両の金を納めることが義務づけられた。現在、砂金取りはかなりマニアックな趣味に位置づけられるが、8世紀中盤以降の小田郡では、農閑期など家族総出で砂金取りに励んでいたことだろう。趣味どころではなく、生活がかかっていた。はたして地元から砂金が出る^Bことが好事なのかどうかわからない。

ほどなく駿河国(現在の静岡県)からも金が発見された。一旦あるとわかれば、皆^Cそういう目で探しはじめるというよい例だ。さらに八溝山地の陸奥国側(現在の福島県など、その他の産地も見つかり、最終的には奈良の大仏とその他の建築内装に用いられたものも併せて1万3000両にまで達した。

日本列島からの砂金の発見は、奈良時代中期には数年〜十数年に一回派遣されていた遣唐使にも影響を与える。金は貴重で高価であるのももちろんのこと、腐らない・錆びない・虫に食われない・かさばらない・小分けができるという特徴がある。紛失・盗難を(う)、旅行に持参する対価としては最高である。

そしてこの特徴は万国共通。必然的に砂金は、遣唐使一行が持参する朝貢品のおもなものとなった。東アジア基準で当時の日本は文化後進国であり、ほかに喜んでもらえそうなものを生み出せていなかったということはあるが、素材そのものとしてキシ^オョウな砂金は交換の対価として大きな役割を果たし、各種漢籍・仏教経典・仏像・仏具・美術工芸品・薬物などの購入費に充てられた。また、入唐する使節に対する恩賜、長期留学生^Eの滞在費^Fとしても中心的な役割を担った。政治形態、法律、都市の作り、仏教、詩歌^Eなど、遣唐使が当時の日本へ移植したものを数えれば、そのインパクトの大きさに驚くことになる。間接的にはあるが、砂金の産出が日本という国のあり方に及ぼした影響ははかりしれない。

このように砂金は、日本からの朝貢品リストの重要な位置を占め、留学生もみな砂金で精算するものだから、大陸に、日本列島には黄金が豊富に存在しているというイメージを植え付ける。これが国際的な大都市長安に滞在していた外国商人の耳に届き、尾ひれをつけた黄金のジパング伝説がイスラム世界やヨーロッパにまで広がってしまうというおまけまでついた。

天平21年(749年)に始まった陸奥での砂金の産出に(え)金を求める活動は、河原での砂金の採取に留^Cまらず、やがて山地での金山開発へと進んでいった。現在の岩手県南部から宮城県にかけて南北に延びる北上山地を中心に多くの金鉱床も発見され、それらを財源として、陸奥の平泉周辺には藤原三代の世が華開く。初代清衡^Gの晩年(1124年)に建立された中尊寺金色堂は、その象徴^Gといえるだろう。

この奥州藤原氏は、藤原北家の系譜と位置づけられ、遠縁^dには西行がいる。遠い遠い同族。新幹線も飛行機もない時代、紀伊国

田仲莊（現在の和歌山県紀の川市）を知行地としていた西行は生涯二度も平泉の地を踏んでいるが、遠い親戚であることと関係があるのだろうか。最初は出家から4年後の天養元年（1144年）ごろ。二度目は文治2年（1186年）なので、なんと69歳の年。この旅の目的は、焼失した東大寺の再建を目指す重源上人（ちようげんしやうにん）の依頼を受け、奥州藤原氏に金の寄進をお願いするためである。12世紀末になっても陸奥には豊富な金が存在していたのだ。

しかし、ついに15世紀になると、遣明船の朝貢品リストには金は見当たらなくなる。最初の発見から約700年、もはや陸奥には当時の技術で回収できる黄金は残っていなかった。ただ南部地方の民謡『牛方節』（うしかたぶし）に、「田舎なれども 南部の国は 西も東も金（かね）の山」とその余韻を残すのみである。

ながながと昔を懐かしんだ金のはなしを書いてきた。でも、それらが霞んでしまうような、もつと昔の出来事をみていきたい。北上山地に産する金鉱床について、いくつか生成年代の決定が行われている。それらを参照すると、およそ1億年前となる。まだ恐竜が元氣一杯だった時代に相当する。

現在の東北日本には、太平洋の東側で生まれたプレートが延々と旅をした末、沈み込んでいる。そのため、沈み込む海洋プレートは冷え切ったものだ。地下深部へと沈み込んだプレートから水が放出され、それにより岩石の一部が溶け、マグマが生成されている。

金鉱床が形成された白亜紀Hの中頃、事情はかなり異なる。当時、日本列島はまだできておらず、ユーラシア大陸の東縁に位置していた。そこでは海嶺で形成されたばかりの、まだ高温の海洋プレートが沈み込んでいた可能性が指摘されている。海嶺が海溝に近接していたわけだ。そのため地下の温度構造も大きく異なり、沈み込んだプレートそのものが溶解するということも起こったらしい。現在の北上山地に分布する深成岩体の化学・同位体的な特徴からの推論である。

北上山地には大小多数の金鉱床が分布している。これらの約8割は、マグマが地殻中に貫入してできた岩石（貫入岩と呼ばれる）と近接しており、金鉱床生成への関与が指摘されている。そのため、この地域の金鉱床は、「貫入岩関連の金鉱床」と分類される。約1億年前、ユーラシア大陸の東縁で、マグマ活動に伴って金鉱床が生成されたのだ。

2500万年前から1500万年前にかけて、ユーラシア大陸から分離した大陸の一部が、今の日本列島の基礎となった。陸奥の金鉱床は、大陸で生まれ、その後8000万年以上の時を経て、「大陸のかげら」として現在の位置まで運ばれたものだ。

金鉱床は、石英の脈に伴われることが多く、この石英の脈は地中に存在している。そして固い。それが何千年、何万年という時間の流れのなかで侵食され、地盤はどんどんむき出しになっていく。やがて、以前は地下だったところが地表になる。

北上山地の場合は、これがゆつくりと進むだけでなく、大陸から切り離され、長距離移動するという大手前まで伴った。その過程で、岩盤には亀裂が入り、地下深部にあった岩石はむき出しになる。多量のレキが生み出され、それが積み重なってレキ岩が形成された。

北上山地の南縁では、涌谷町の黄金山神社から約8km東南東に進んだJR和瀨駅付近や石巻市の日和山などに分布している。金鉱脈の破片は一旦このレキの一部として取り込まれ、レキ岩となったのちに、さらにそのレキ岩が露出・侵食され、砂金が形成されたと考えられている。奈良時代、日本列島で最初に発見された砂金は、金鉱脈↓金鉱脈のレキ↓砂金、と二段階にわたり、天然・自然が咀嚼したものといえる。

*問題作成の都合上、文章の一部を省略・変更しています。

問題

問1 ー線アゝオのカタカナを漢字になおしなさい。

問2 ー線aゝeの漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問3 (あ)ゝ(え)にふさわしい表現を【 】に語を入れて完成させるのに適当な語を、1ゝ12からそれぞれ選び、番号で答えなさい。同じ番号は一度しか使えません。

あ 歯牙にも【 】

い 一致を【 】

う 【 】に置く

え 【 】を発する

- | | | | | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|----|----|----|-----|----|----|
| 1 | 及ばない | 2 | かけない | 3 | 立たない | 4 | 探す | 5 | 届ける | 6 | みる |
| 7 | 横 | 8 | 縦 | 9 | 上 | 10 | 下 | 11 | 端 | 12 | 緒 |

問4 ー線A「報告を聞いたことがない」とありますが、なぜですか。理由を四十字以内で書きなさい。

問5 ー線B「好きなのかどうかわからない」とあります。ここでの筆者の考えを理由とともに書きなさい。

問 6 Ⅱ線 C「そういう目」とはどんな目ですか。

問 7 Ⅱ線 D「この特徴」とありますが、本文に挙げられている特徴をすべて抜き出しなさい。

問 8 Ⅱ線 E「遣唐使」における砂金の役割をそれぞれ三字以内で四つ抜き出しなさい。

問 9 Ⅱ線 F「日本という国のあり方に及ぼした影響」とあります。具体的にはどのような影響を及ぼしましたか。

問 10 Ⅱ線 G「その象徴」とは何ですか。説明しなさい。

問 11 Ⅱ線 H「白垂紀の中頃、事情はかなり異なる」とありますが、この「事情」について説明しなさい。

問 12 ⅠⅠ線 奈良時代、日本列島で最初に発見された砂金は、「二段階にわたり、天然・自然が咀嚼したものといえる」とあります。これについて百五十字以上二百字以内でまとめなさい。